

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

東日本大震災が起きた直後は、多くのボランティアの方々が東北各地を訪れ、ガレキ撤去や泥かきに大きな力を発揮してくださいました。企業もボランティア休暇を認めてくださったり、新人研修の一環として、ボランティアを送ってくださいました。各カリタスペースでも今は、ボランティアとして来てくださる方々が減少し、困っています。しかし、毎年、夏休みは、大学生、高校生のボランティアが増える時期です。今年の夏も、東北各地で学生の方々がボランティアとして活躍してくださいました。その中の、宇都宮海星女子学院、東京の暁星高校、聖パウロ学園高校の活動報告と「チーム・カリタス^{せんえん}仙塩」の支援活動をご紹介します。

カリタス石巻ベースの「七夕まつり」に参加して

チーム・カリタス仙塩 豊屋丁教会 佐藤栄美子

東日本大震災から6年が経過し、復興住宅が整備されるなど、被災者の方やボランティアを取り巻く環境が大きく変化していることを踏まえ、各小教区でのボランティア活動を継続しつつ、今年4月より仙塩^{せんえん}8教会[※]の有志が集まり「チーム・カリタス仙塩」として活動を開始しました。

※仙塩8教会とは、仙台・塩釜地区の元寺小路、豊屋丁、一本杉、八木山、北仙台、東仙台、西仙台、塩釜の教会をさす。

いまのところ、カリタス石巻ベースへの支援が主な活動となっており、石巻ベースの利用者の皆さんが親しみを込めて「カリタスさん」とスタッフを呼んでくださっていることから、今まで通り親しんでもらえればと願い、チーム名称に「カリタス」を入れることにしました。

各小教区のボランティア数人が、4月から月に数回のペースで、石巻ベースを訪問し、主に傾聴などの活動を続けています。最初はベースの雰囲気にも溶け込めずにいましたが、約3カ月が経ち、最近では利用者の皆さんのお顔も覚え、話にも花が咲き始めました。



そのような中、7月7日（金）天候にも恵まれ、石巻ベース主催の「七夕まつり」が行われました。チーム・カリタス仙塩として、石巻ベースでのイベントへの初参加となりました。平日だったことから子どもたちの参加が若干少なかったのですが、いつも利用している方のほか、近隣の住民の方々もお見えになり、当日は約50名がおいでになる盛況となりました。ボランティアとスタッフ30名を含め約80名が七夕まつりを大いに楽しみました。

七夕飾りも利用者の方々とスタッフの他、ボランティアが数カ月かけて準備をしたもので、心と願いのこもったとても綺麗な飾りが室内外に飾られました。

そして、いつも「お茶っこ」する屋内のホールでは、アコーディオンの伴奏で皆が合唱したり、景品をかけたじゃんけん大会などが行われたりと、大いに盛り上がりました。参加者の皆さんも笑顔で自発的に踊り出すなど、楽しいひと時を過ごされました。

一方、屋外ではフランクフルト等の飲食コーナーを設けたほか、輪投げや水ヨーヨー釣りなど、お祭りらしいゲームが準備されており、地域の方々も楽しまれたようでした。参加された方々の一番人気は輪投げゲームで、まわりの人たちもまき込み白熱するぐらい大いに盛り上がりました。



輪投げやじゃんけん大会は、皆で大盛り上がり！

ここで、参加したボランティアの感想をいくつか紹介します。
○今回の企画は、「七夕まつり」を通してベースを利用される方々とボランティアの関係が深まるととても良い機会となった。（一本杉）
○当日の来場者の方からの「ありがとう」の一言がとてうれしく、また、他のボランティアとの出会いなど貴重な体験ができ、充実した一日になった。（北仙台）
○参加した方々に笑顔で楽しんでいただいたので、私たちにとっても、やりがいを感じる一日となった。これからも少しでも元気になっていただけるよう頑張りたいと強く感じた。（北仙台）

今後も私たちは小教区がお互いに協力し合い、チーム・カリタス仙塩として石巻ベースを支援し、被災された方々に共に寄り添い、少しでも役に立てればと思っています。

走り始めたチーム・カリタス仙塩に皆さまのご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。



七夕まつり参加者とボランティアみんなで記念撮影

「震災7年目に見えたこと」

宇都宮海星女子学院 報告：藤田恵神父（さいたま教区）

今年で5回目となる生徒会が企画する宮城県・亶理町でのボランティアは、7月16日ー17日に行われた。中学生から高校生まで12人の生徒たちは、被災した方々と交流する一方で、福島第一原発事故の除染現場や被災地の子どもの心の問題などを学んだ。



16日午前 亶理教会ミサに参加（教会改修工事のため、FMM 亶理修道院にて）

一日目の往路に常磐自動車道を使った。2015年に仙台まで全線開通したものの、原発事故現場近くを通過する際の放射線量の影響を心配し、これまで見合わせていた。しかし汚染された地域を見ることも、震災の学びの一環と考えた。原発のある大熊町・双葉町に近づくにつれ、道路脇に表示される放射線の値が高くなる。バスの車窓から、削り取った表土が収められた大きな袋が何段にも積まれた様子を見学した。その膨大な量に愕然とし、何人もの生徒がその驚きを感想に書いていた。

一日目は、いちご農家の森弘一さんを手伝う労働ボランティア。昨年同様いちごの苗取りと苗の植え付けを手伝った。生徒たちは亶理のシスターたちと会話しながら作業したが、2時間余りの作業に「腰が痛い」と悲鳴を上げた。しかし、「森さんがこれを何日もやっているのだと思うと……」とつぶやく生徒もいた。時間が押していたため、森さんに最近の話を聞く機会がなかったのが反省点。だが5月に地元紙に掲載された森さん夫婦の震災体験と復興への足取りを紹介した記事から、絶望から立ち上がる人間の力強さを感じた。



二日目は、被災者と交流するボランティアを町内二か所の集会所で行った。そのうちの一つは、海に近い災害復興集合住宅に隣接する集会所。この集会所と近所の中学校の教室は、一階ではなく二階にある。それが津波対策であることに生徒は驚いていた。

交流ボランティアは、地元のNPO「亶理いちごっこ」の協力で行った。海に近い集合住宅は、まだ住民のコミュニティーが固まりきれず、「いちごっこ」の呼びかけに応じた、遠くからの参加希望者を「いちごっこ」が車で送迎してくれた。ここの「いちごっこ」のスタッフは、わたしたちが数年前まで行っていた仮設住宅でのボランティアで、顔見知りになった女性。企画の時間が余った時に、「みんなミッション校だから聖歌を歌って」と助け舟を出してくださり、とても活気があった。生徒の用意したペットボトルのボーリングや空き缶積み競争などは、単純な遊びでもドキドキ感があり、参加した方々と協力しながら遊ぶ中で、一体感が生まれ、心と心の距離が近づいた。

参加者したある女性は、和紙で作った楊枝入れを生徒一人ひとりにプレゼントしてくださった。ボランティアが一方通行ではなく、人と人が相互に与え合うものであることを実感できた。



被災者の方と楽しみながら触れあうことができた時間でした



午後は、「いちごっこ」の代表・馬場照子さんの話を聞いた。印象的だったのは、被災した直後は再建に必死な親を見て、自己主張を抑え、我慢を強いられた子どもが、生活が落ち着きを取り戻すと、満たされなかった心の傷が、6年を経て出てきているということ。ニュースではあまり触れられない現地の話に、多くの生徒が驚きを隠せなかった。

震災の記憶が次第に風化する中、自主的にボランティアを呼び掛けた生徒会と、物心両面でサポートして下さった学校関係者に感謝したい。現地を訪れたからこそ受けた様々な出会いと思い・経験が、生徒の心の畑に蒔かれた“からし種”となれたら幸いだ。



いちごっこ代表馬場さんの話を真剣に聞く生徒たち



東京暁星高校 米川ベースでのボランティア体験記

東京暁星高等学校の生徒6名、引率1名が、2017年7月31日から4泊5日の日程で、米川ベースのボランティア活動に参加しました。今回、引率の石井政仁先生から活動に参加した生徒たちの感想が届きましたので、その一部をご紹介します。

僕は今夏に初めてボランティアに参加させていただきました。最初は不安と緊張もありましたが、被災地の人の力になれるよう頑張ろうという意気込みで米川に向かいました。

米川ベースでは食事を作ってくれる人や活動場所まで車で送迎してくれる人など、僕たちボランティアを支えてくれる人がたくさんいて心強かったです。

僕は活動の3日間、全て漁業支援の活動でした。活動場所の漁師のお母さんが、志津川湾で取れた海産物を使った料理を出してくださり、それが大変美味しく感動しました。また、作業をしている最中に、震災時の出来事などを話してくださる人が多く、大変ためになりました。

その中で、最も驚いたのは津波の高さです。自分が思っていた以上に高く、実際の高さは20m以上と聞きました。それが街に繰り出すなど、想像しただけでも恐怖でした。

米川ベースでの様子



朝の祈り



朝食時の1コマ

また、被災地案内で見た高野会館にも衝撃を受けました。その建物の屋上では、高齢者など327人と犬2匹が全員助かりました。そこで僕が1番驚いたのは、高齢者の中には車椅子の方も多かったという点です。たとえ猛烈な地震が起こり、破壊的な津波が押し寄せても、冷静になり、若い者たちが連携して力を合わせれば、助かる命は多くあると改めて感じました。

自分が今年、4泊5日のボランティアに行った事はあの甚大な被害から見れば米粒のようなものかもしれませんが、それでも僕は達成感を強く感じました。高野会館でのエピソードのように、人間一人一人が自分に何ができるかを考えて手伝え、復興への道はますます短くなると思います。

東日本大震災が起きて約6年が経ちましたが、人間はまだまだこの災害に学ばなければならないと僕は再確認しました。 中内 翔太

被災地案内 で訪れた場所



南三陸町

3階まで津波の被害を受けた高野会館



旧石巻市立大川小学校

手前まで津波が押し寄せた場所

今回、4泊5日で米川ベースの被災地ボランティアに行きました。1日目、5日目は、東京と米川ベース間の移動で、1日中ボランティアで過ごしたのは、2日目、3日目、4日目でした。

2日目の初めてのボランティア活動先は、佐々木さんという漁師さんの元で、午前には浮きふについたフジツボなどを取る仕事で、午後は袋のシール貼りをしました。午前の仕事は、とても力のいる仕事で、筋肉痛になりました。シール貼りは、根気のいる仕事で、6人で1,500袋をやりました。仕事の最中、佐々木さんに3・11の話をつたう機会がありました。佐々木さんの漁港には、20数mの津波が押し寄せてきたそうで、避難所をも超える津波だったそうですが、回避できたみたいです。それでも、津波にのまれてしまった人もいたそうです。

3日目は、午前には、長さんという漁師さんの元で昆布巻きをやり、午後は被災地見学でした。昆布巻きも根気のいる仕事で、昆布をしっかり伸ばし、何重にも折りたたみ、それを結び、少し長くなったところを切るという仕事でした。長さんの話は興味深く、特に長さんのような昆布巻きの漁師さんがとても少ないという話には、驚きました。

午後は、様々な場所をまわり、大川小学校と旧南三陸等防災庁舎の無惨な姿、高台から見た今の姿と写真で見る以前の姿の大きな違いが、特に印象に残り、改めて津波の恐ろしさを感じました。

4日目は漁師さんの元で牡蠣の殻を掃除する仕事で、殻の掃除も根気のいる仕事でしたが、途中、小さな蟹が出て来たりと、リラックスしながら仕事をする事が出来ました。作業が終わった後には、漁師さんの飼い犬の散歩をしました。犬がとても人懐っこくて、可愛かったです。

最後に今回のボランティアで津波の恐ろしさ、東北の人の温かさを感じました。ボランティアでお世話になった皆さん、ありがとうございました。 宇田川 海渡

僕は、7月31日から東北の復興ボランティアに参加した。初日は移動だけだったが、乗り物酔いしやすい僕は、バスでの移動が二時間を超えると聞いた時、無事着けるか不安になったが、なんとか寝てやり過ごし、無事に米川ベースへ到着できた。

二日目からボランティア活動をした。僕は、南三陸の港で漁業支援に参加した。午前中の作業は、鉈(なた)を使って重りに付いたフジツボやムール貝の死骸をとる作業だった。たった一年間海に沈んでいただけで、貝がびっしりと張り付いていたのが驚きだった。また、重い鉈で貝を取る作業に加え、貝が腐っているのか分からないが、鼻を塞ぎたくなるような強烈な臭いがしたり、虫や蜘蛛がうじゃうじゃいる場所だったので、虫が苦手な僕にとっては、とても苦しい活動だった。

待ちに待った休憩時間は、思っていたよりも長く、自由なもので、一緒に作業していた友人たちと遊んだ。海岸のコンクリートに藻が張り付いていて、友人たちが滑って漫画のような尻餅をついた姿は、とても面白く、リラックスすることができた。

午後は、ほやの出荷袋のシール貼りをした。皆でしゃべりながら楽しく作業しつつも、6人で1,500袋を完成させることができ、やりがいを感じた。ボランティアが終わると、そのまま温泉に向かった。疲れた体に温かい湯が染み渡り、とても気持ち良かった。

三日目は、前日に続いて漁業体験に参加した。小さい鉈を使い、牡蠣に付いた汚れを取る作業だった。休憩時間には、ダイバーの方が採れたてのウニを食べさせてくれた。しかし、ウニを食べるとすぐに気分が悪くなり、漁師さんの家を出してくれたせっかくの昼ごはんも残してしまい、申し訳ない気持ちになった。

作業後、漁師さんが飼っている犬の散歩をした。犬はとても懐いてくれて嬉しかった。この日は、とても疲れていたから夜もあまり食欲が無く、元気が出なくてつらく感じる一日だった。

ボランティア最終日は、もう一度犬に会いたかったので、牡蠣の清掃に行った。作業自体は同じだったが、友人がいたのでとても楽しかった。犬の散歩も、友人と一緒に走ったりできて、楽しかった。

今回のボランティアを通していろいろな事を感じられた。木の上の高いところにおもりが引っかかっていて、震災時の津波の壮絶な高さを実感した。また僕達の生活も賄いさんや皆で助け合って成り立っているのを感じて感動した。 西村 譲



「にじのわ」での射的大会！

休憩時間に海で身体をアイシング？

私は、今回カリタス米川ベースでボランティア活動のお手伝いをさせていただきました。前回カリタス釜石でやらせていただいたのですが、ボランティアが思っていたより楽しくでき、またやりたいと思っています。今回また機会が回ってきたので参加しました。

今回のボランティア活動は、障がい児童見守りのお手伝いとぶどう園の雑草取り、被災地巡りででした。

児童見守りでは、子どもがとても元気で、こちらのエネルギーを吸い取られる位でした。子どもは好きなので苦にはなりませんでした。鼻や耳をなめられるのは、ずっと慣れないと思います。2日間行きましたが、初日は普通に子どもたちと遊んだり寝かしつけたりするだけでしたが、2日目は夏祭りの準備片付けなどの手伝いでした。ただ射的をやらせてもらうなど私たちも遊ばせてもらったので、とても楽しかったです。

ぶどう園では主に雑草取りをしました。普段体を動かさないのととても疲れました。ぶどうが無事ワインになれば良いなと思いました。

ぶどう園の手伝いの後は被災された場所を巡りました。震災遺構や復興途中の土地、最近復活したビーチなど色々な場所を案内してもらいました。既に6年以上も経っているのにまだまだ復興は終わっていないことをこの目で確認しました。

今回のボランティアでは生徒の中で私が最上級生であった事と未知の土地であった事、他校の方たちと活動するという事で色々不安でしたが、後輩のみんなや先生、他校の方々やベース長の千葉さんその他地元の方々のおかげで無事楽しくボランティア活動ができました。機会があればまた参加したいと思っています。 徳田 湧大



ボランティア活動に参加された東京暁星高校の生徒の皆さん



被災体験の話真剣に聞く生徒の皆さん

午後は、オープンスペースで、地域の方々を招き、生徒たちによるお楽しみ会です。この日の参加者は、男性6名、女性11名でしたが、最初に、参加者へ向けて、学校のある八王子市の紹介と聖パウロ学園の紹介をしてもらいました。聖パウロ学園は、聖パウロ修道会による神父を志す学生の教育より発展してきた全寮制の男子校でしたが、修道会の撤退に伴い普通高校としての側面が強くなっていき、2002年に男女共学化・全寮制廃止となったことで、今は女性もいますとの説明がありました。

その後、毛糸でぼんぼん作りや言葉ビンゴ、お茶っこを行い、生徒と参加者の皆さんが一つになって、みんな楽しそうに笑顔溢れる時間を過ごされていました。



一緒にぼんぼんを作ったり、お茶っこをして交流を深めました

イベント終了後、生徒の皆さん一人一人が「良い体験をしました」と分かち合ってくださり、東京へと帰られました。

石巻ベースでは、ボランティアの受け入れ人数に制限がありますが、今回、生徒の皆さんが、じっくりと被災地を巡り、被災体験を聞いたことによって、今後も被災地に思いを寄せてくださり、また活動へ参加したいと思ってくださる機会となったので、今後もこのような時間を設けていければと思います。

《生徒の皆さんから寄せられた感想（一部抜粋）》

○震災前のような街並みはなかったけれど、現地の皆さんが前向きになって生活している様子が現地での交流からわかりました。「自分たちの意志で来てくれたことがうれしい」というお言葉を受けて、実際に現地に足を運んで自分で知ることの大切さを学びました。（2年男子）
○今回の活動を通して、災害時には「とにかく前に出る、活躍しないでいいから」という言葉が印象に残っています。今まで率先して前に出ることがありませんでしたが、緊急時には自分にできることを考えて行動できる人になりたいです。（1年女子）

○震災が風化する前に、現地を見てお話を聞くことができ、本当に貴重な体験となりました。勝手に悲観的な考えで被災地を想うのではなく、自分たちが体験した「被災地の今」をしっかりと伝えていきたいです。（3年女子）



聖パウロ学園高等学校 石巻ベースでの活動

この夏、東京の聖パウロ学園高等学校の生徒8名と引率2名が、石巻ベースで1泊2日のボランティアを行いました。石巻ベースでは、これまでも学生ボランティアを受け入れたことがありましたが、今回初めて被災体験を聞いていただく時間を設け、丸1日を被災地巡り、残り1日を、午前被災体験を聞く時間、午後は生徒の皆さんが考えたイベントを行うという日程で活動していただきました。

初日の8月9日、午前8時10分頃に生徒の皆さんがベースへ到着され、2階宿泊室へ荷物を置いていただいた後、1階ホールでミーティングを行いました。ミーティング後、被災者のため、災害で苦しんでいる人たちのため、被災地巡礼のために全員で「東日本大震災被災者のための祈り」を唱えて、8時30分にベーススタッフ2名同行のもと、被災地巡りに出発しました。

数日前から台風5号の影響がないか心配していましたが、この日は若干の雨にはあったものの、「日和山公園→がんばろう石巻・南浜つなぐ館見学→女川町地域医療センター、女川駅、商店街見学→雄勝地区（仮設商店街にて昼食）→旧大川小学校→開成、南境仮設住宅を車内から見学後、ベース到着」という全行程を順調に巡ることができ、午後3時10分頃に無事、ベースへ到着しました。

翌10日は、午前中は1階ホール(オープンスペース)を貸切にし、スタッフの佐藤さだ子さんと、普段、オープンスペースを利用している高橋明美さんから、震災体験について話していただきました。

佐藤さだ子さんは、震災時、自分がとった行動について話してくださり、特に、コミュニケーションの大切さと、「聞くこと」の大切さを話されました。高橋明美さんは、震災直後、どのように人々と関わり、多くの人と連携をとりながら人々を救済するためにどのような働きをしたかを話してくださいました。ずぶ濡れで泥だらけで運ばれてきた3,000人もの人々を助けた話は感動的で、生徒たちは真剣に聞き入っていました。

その後、二人一組になって聞いたことを分かち合い、もう少し詳しく聞きたいところを質問してもらい、「物資で何が一番役立ったか」や、「とっさの時の判断をどのようにしたら良いのか？」等の質問が出ていました。